

# イネ白葉枯病情報第1号

令和5年6月23日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

早い時期に感染し、出穂期までに発生が多いと減収につながります  
イネが冠水するとまん延する恐れがありますので注意しましょう

## 1 イネ白葉枯病について

イネ白葉枯病は細菌による病気で、感染するとイネの葉縁部が白く枯れ、さらに病気が進行すると、葉先が白っぽくなるため、本病が多発した水田は一面に白くなります（図1～3）。また、イネの幼穂形成期から出穂期までに発生が目立つと、減収などの激しい被害となるおそれがあります。

前年（2022年）9月下旬の巡回調査（県内68ほ場）では、イネ白葉枯病の発病株率が4.88%（平年2.39%）であり、過去10年と比べて3番目に高い状況でした。一部では、発病株率が100%に達するほ場も確認されました。発生地域は尾張地域が中心ですが、他の地域でもイネ白葉枯病の発生が確認されました。近年の発生量は増加傾向にあります（図4）。

また、本年6月上旬に発生した豪雨の影響で三河地域を中心に多くのほ場が冠水しました。**本病は、台風等の大雨や強風、ほ場の冠水によって発生が助長される**ため、今後の発生に特に注意が必要です。



図1 白葉枯病発病葉



図2 白葉枯病発病株



図3 多発水田での発生状況（全体的に白い）

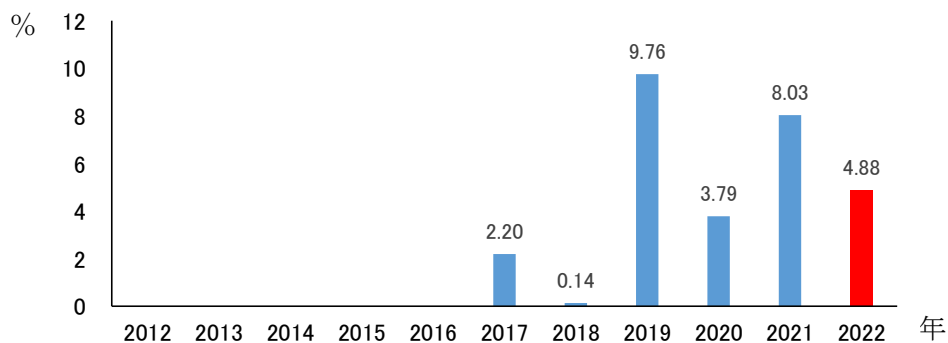


図4 近年の9月下旬調査におけるイネ白葉枯病の発生量（発病株率%）

## 2 イネ白葉枯病の感染経路

イネ白葉枯病の病原菌（細菌）は畦畔や水路に自生するイネ科雑草のサヤヌカグサの根に寄生し、越冬します。翌年、この雑草の生育とともにイネ白葉枯病の細菌が増殖し、一次伝染源となります。細菌は田面水や用水に入り、それらが風雨によって飛ばされて、イネの葉縁にある水孔や傷口から侵入することで、イネに感染します。

そのため、**台風などによる大雨や強風によって発生が助長され、特にイネが冠水すると本病がまん延する恐れがあります。**

## 3 防除対策

**前年発生が多かったほ場では出穂3～4週間前に防除しましょう。また、冠水したほ場では本病の発生状況を確認し、発生を確認したら速やかに防除しましょう。**

薬剤は、いもち病防除にも利用されているプロベナゾールやチアジニルまたはイソチアニルが有効です。育苗時にこれらの薬剤を含む箱施薬を行った場合も、**出穂3～4週間前に表を参考にして薬剤散布**を行いましょう。

浸冠水しやすい水田では、用排水路の整備を行うとともに、畦畔等の除草を徹底して第一次伝染源であるサヤヌカグサを除去しましょう。

なお、イネの品種によって発病程度に差があり、愛知県の平坦地で栽培されている品種の本病に対する抵抗性は、あきたこまちはやや弱、あさひの夢、ゆめまつりは中、コシヒカリ、あいちのかおり SBL と大地の風はやや強となっています。しかし、菌密度が高い場合、抵抗性品種であっても発病する可能性があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場においても防除を行いましょう。

表 イネ白葉枯病に対する主な本田防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	FRACコード
オリゼメート粒剤	プロベナゾール	移植活着後及び出穂3～4週間前 (収穫14日前まで)	散布	2回以内 ※	P2
オリゼメート1キロ粒剤		収穫14日前まで			
ルーチン粒剤	イソチアニル	収穫30日前まで	湛水散布	2回以内	P3
ブイゲット粒剤	チアジニル	葉いもちの初発20～7日前 (収穫45日前まで)	湛水散布	2回以内	P3

※プロベナゾールを含む農薬の総使用回数は2回以内（移植時までの処理は1回以内）

FRACコードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRACコードの詳細は、[https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labomechanism/code\\_pdf01\\_2022.pdf](https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labomechanism/code_pdf01_2022.pdf)を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。